

動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列, 第60巻, 第3号, 2009年で論じている。

- 18) keeping perception/keeping memories の実行にあたって, 重要となるのは, “傷つきやすさ/攻撃されやすさ, 罪責/悪/弱さをつつみかくさず, 道理のある話をする (chiacchierare con tutte le vulnerabilità e le ragioni)” ことである。はじめての土地での最初の印象は, 「いままでの自分の常識, 自分の感覚からすると理解出来ない」「とても適応出来ない」というものであり, “旅/フィールドワーク” が終わる頃には, この最初の「違和感・アウェイ感覚」は, かなり薄らぐ。だからこそ, 最初の「違和感・アウェイ感覚」を大切に, たとえそれが自分の狭量さや偏見から来ているものであったとしても, そういうことがあったことをきちんと記録しておく (後から自分に都合良く書き換えてしまわない)。そして, 最初の「違和感・アウェイ感覚」が薄らいだ後に, 自分のなかに“埋め込まれ/植え込まれ/刻み込まれ/深く根をおろした”感覚と, 新たに体験したものの個々の要素のどこが近く, どこが遠く, どんな関係になっているのかを, 丹念にときほぐしていくことが大切となる。たとえば, カーボベルデに到着してからまだ日が浅かったサン・ヴィセンテ島の港湾都市ミンデロ滞在中には以下のようなことを考えていた。

「旅の疲れからか, 比較的早めに就寝するが, 夜通し聞こえるディスコや居酒屋からもれる大きな話し声や笑い声, 強い風の音と, 薄い毛布一枚の寝具だったために, 寒さと喉の痛みから目を覚ましてしまう。私たちがコートやセーターを着て街を歩いているのに, 地元のひとたちは半袖やTシャツ一枚でいて, 宿の女主人に毛布をもう一枚くださいと言っても『え, どうして?』と驚かれる。これまで多くの国や地域を旅してきたが, 今回は慣れるのに時間がかかってしまっているのはなぜか。ベッド, 水, 電気, 電化製品, 食器, 必要なものがないわけではない。だが, フォークやスプーンがほしいときになかったり, 毛布がなかったり, その時に必要だと感じるものがいつも欠けている。ミンデロはカーボベルデ第二の都市でもあり, 観光客向けの店なども多数存在しているのだから, 物品の全般的欠如の問題ではない。ということは, なにが生活上必須のものであるかに関する知覚のあり方の違いかもしれない。これは, 国民社会や地域社会ごとの違いだけではない。いまとなつては, 思い通りの形に温度や湿度がコントロールされたフローリングの室内で暮らしていることから, 欠如に対してありあわせのものでやりくりする能力が著しく衰えてしまっているのだと感じる。これは, 若い頃には持ち合わせていなかった知覚のあり方である。朝起きてきたメルレルから, 『毛布がなかったら隣のベッドのカバーとかコートとか, ありあわせのものをひっぱがしてかければよかったじゃないか。そうしていると思ったよ』と言われ, はっとさせられた。このような欠如に対するやりくりの能力の衰えは, カーボベルデのひとびとにも起こっているとコッコは言う。ソニーの製品などを帰還移民たちが持ち帰り, 若者たちは, かなり豪華な端末を持ち歩いている。いくつかの欠如はあたりまえでそれを智恵で補えばいいというあり方から, ひとつの製品の欠如は致命的なものとなり, その欠陥を補うことが唯一の至上命題となる。そのための金が必要となり, 手段を選ばなくなるという構造は, グローバルに存在し, その影響は, 島々の隅々にまで及んでいる。ハーバーマスが, 「生活世界の植民地化」を論じたときにまだ観念的な先取りであったものが, 広く深く展開し, この惑星の隅々まで, 個々人の内面にまで, かつてのコロニアルな状態とはかたちを変えながらの新たなコロニアルな状態がつけられている。現在のポスト・コロニアルが, 過去のものとして決定的に違うのは, 個々の地域や個人の内発性や潜在力を奪うかたちでの「消費や情報へのコロニアルな状態」が, ニューヨークやロンドン, パリといった「世界都市」や, 「先進社会」の諸地域においても進行し, そのようなマクロ・トレンドのなかで, 個々の地域, 個々人においては, それぞれ別の, 固有のかたちの悲劇が起こるといった構造を持っている。つまり, 全面的で内面的であるという点にある。ポルトガルの航海者が, 港や商館をつくり, 地元のひとび

とがそこで働き、それぞれの生活世界の余地を遺しつつ、衝突・混交・混成・重合していった時期から、スペイン以後のコロニアリズム、さらにグローバリゼーションを経て、あまりに隔たった場所にわたしたちは来てしまっている。」(2009年2月21日、サン・ヴィセンテ島のミンデロにて)

- 19) Associação das universidades de língua portuguesa に参加している国立カーボベルデ大学は、2009年の調査での私たちとの出会いを機縁として、ISC (島嶼社会比較研究所) の代表でもあるメルレルが中心的役割を果たしている「世界の島嶼地域の大学間ネットワーク (R.E.T.I. = Rete di eccellenza dei Territoriali Insulari)」に参加することとなった。RETI という名称は、コルシカ語でも reti がつらなりを意味するところからつくられ、2010年7月にはコルシカ、2011年7月にはマデイラで、地中海・大西洋地域、そしてマイクロネシアなどから、20以上の大学の学長が集まり、「島嶼社会が直面する諸問題についての領域横断的な研究交流」の具体化についての話し合いがなされた。参加しているのはアウトノミアの要素を強く持つ島々だ。アウトノミアは、政治的自治のみならず文化や領域を持つことも含まれている。こうした島々のなかで、第二次大戦以前から大学を有していたのは、シチリア、サルデーニャ、マルタなどごくわずかだった。1970年代にRETIを設立しようとしたらとても不可能だったろう。メルレルは、「島の自然：文化、智慧、社会組織 (NICSOS = Nature delle isole: culture, saperi, organizzazioni sociali)」というセクションの責任者であり、「島嶼社会の陸地と海洋資源の統合的マネジメント (Managemento integrato dei territori insulari e risorse marine)」と「持続的発展と島嶼社会のアイデンティティ (Sviluppo sostenibile e identità dei territori insulari)」を研究テーマとしている。
- 20) Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart : Individualism and Commitment in American Life*, The University of California, 1985 (=1991年、島蘭進・中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房), 186-188ページより。
- 21) 前出『プレイング・セルフ』62-64ページより引用。
- 22) “旅／フィールドワークする社会学”には“不協の多声”がともない、それはときに自己崩壊の危機と苦痛をもたらす。サッサリ大学で“ひとの移動”の社会学を教えるM. コッコは、アフリカからヨーロッパへの移民の研究のために、パリそしてセネガルへと留学し、カーボベルデにも数回訪れ、シダーデ・ヴェーリャの店主夫妻とはすでに旧知の間柄だった。コッコは、メルレルと筆者が帯同したことにより、いままでのアフリカへのフィールドワークでは感じたことがなかった危機感を感じたという。私たちもまた、「もうたくさん！ 私の大好きなクレオール音楽や本といっしょにいたいから外に出ない」と不快感を顕わにして押し黙ってしまった彼女に当惑した。“旅／フィールドワーク”の後のやりとりのなかで、そのときに起こったことを彼女は以下のように理解していた。「イタリアからカーボベルデに『移住』したいと考えるひとたちは、ただ、自分の人生に虚しさを感じていて (つまり、自分の内面に問題をかかえているひとたちで)、『自分探し』のためであったり、ただ『珍奇な発見』をしたいだけの、思慮の浅いひとたちだけれども、私が友人になったひとたちは、そのような人間のはずがない。実はこの見方が自分の願望を投影しているだけで、少しおかしいということにはうっすらと気付いているけれど、認めたくない。あなたたちがもたらす解釈が的確なものだったとしても私には苦痛だった。私はたったひとりでここにやって来て、自分の世界を削り上げていたはずなのに、なぜそれを壊そうとするのと思ったわ。だから外からの声のすべてを遮蔽してしまいたかったのよ」と。
- 23) 前出『プレイング・セルフ』3ページより引用。
- 24) メルレルは、ひとの移動について、「移動はまたある所与の状況の外に出ること (emigrare) であると同時に、新たな状況へと入り込むこと (immigrare) であるが、それは、度重なる多方向への旅 (帰還し、再び旅立ち、再び入植し、複数の場所の間で、一定期間をおいて繰り返し移動しつつ

けること)を繰り返すという〈ひとつの再帰的な旅〉をしつづける状態を意味する。この観点からするなら、たまたまあるものが特定の土地に留まり『定住している』という現象は、この循環し再帰し多系的に展開していく旅の一場面を見ているということになるだろう」(Alberto Merler, “Mobilità umana e formazione del nuovo povo / L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse”(=新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程—移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」新原道信他編『地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂, 2006年, 63-64ページより引用)と述べている。しかしこの動きは、「惑星社会」においては、テリトリーを前提とした地理的・物理的移動にとどまらず, “心身／身心現象”と“衝突・混交・混成・重合”するかたちで現象しているのである。

- 25) サン・ヴィセンテ島のミンデロ滞在中に、コッコは、「いまバカンスで来ていますが、わたしはカーボベルデの地元の人間ではありません。英語、スペイン語もフランス語、イタリア語も話せますし、ニューヨークのメリルリンチで働いています」というカーボベルデ人の青年から、メリルリンチの名刺を渡され、「あー！ 大学の先生ですか。それならわたしたちはこの世界を行き来する自由人の仲間ですね」と言われたという。
- 26) 伊藤るり他「座談会フロンティアとしての玉野井理論」『新沖縄文学』86号, 1990年を参照されたい。玉野井の労作のとりまとめとしては、玉野井芳郎著、梶田敦・岸本重陳編『玉野井芳郎著作集2 生命系の経済学に向けて』学陽書房, 1990年。あるいは玉野井芳郎著、鶴見和子・新崎盛暉編『玉野井芳郎著作集3 地域主義からの出発』学陽書房, 1990年などを参照されたい。
- 27) 1996年の夏、メルレルたちとのブラジルへの“旅／フィールドワーク”において、サンパウロ大学、リオデジャネイロのフルミネンセ大学、エスピリットサント州のヴィトリア大学で国際シンポジウムとセミナーをおこない、ここでメルレルの恩師で南米最高の社会学者O. イアンニ (Octavio Ianni)とも邂逅した。エスピリットサント州では、MEPES-Movimento de Educação Promocional do Espírito SantoとLa AIMFR (Associazione Internazionale dei Movimenti Famiglie di Formazione Rurale)の共催で、第60回の農村家族学校 (Escolas Famílias Agrícolas)の国際大会が開催され、メルレルたちとともに全日程に参加した。さらに、実際に学校が開かれているエスピリットサント州のコロニア (開拓地)のひとつ、ドミンゴス・マルティンス (Domingos martins, 1,134平方km, 海拔542km, 人口26,102人, 1847年にドイツ系, 1880年にイタリア系によって植民。言語は、ポルトガル語, ドイツ語, ポメラニア [Pomeranea バルト海沿岸の旧ドイツ領で第二次大戦後, オーデル川以西がドイツ領, 以東がポーランド領となった]とフンスリュック [Hunsruck ライン山地南西の高原]の土地の言葉, そしてイタリア語が使われている)。このときのコミュニティ調査の成果は, Giuliano Giorio - Francesco Lazzari - Alberto Merler (a cura di), *Dal micro al macro. Percorsi socio-comunitari e processi di socializzazione*, Verona: CEDAM, 1999としてまとめられている。
- 28) “瓦礫や廃墟の切れっ端 (rovinaccio)” “破局へと至る瓦礫 (andare in rovina)” “未発の瓦礫 (macerie / rovine nascenti)” については, 前出『境界領域への旅』159-209ページで詳しく論じている。“瓦礫”が顕在化した「3.11」以後を生きることの意味については, 新原道信「出会うべき言葉だけを持って—宮本常一の“臨場・臨床の智”」『現代思想 総特集=宮本常一 生活へのまなざし』vol. 39-15, 2011年で論じている。
- 29) もしメルッチがいまのカーボベルデあるいは日本社会を見ていたら, メルレルと同様に, たとえばこうしたこと目をとめるだろう。

プライアの共和国広場の教会のなかに入ると, ちょうど日曜日のミサをやっていた。ミサの終盤で, みんなでミサ曲を唱和していたのだが, 最後列でひざまずき (おそらく目が見えず), しわがれた声を喉からこすり出すようにして歌っていた老婆の存在感に圧倒された。どのよう

な暮らしをしてきたのだろう。この女性のみならず、静謐の時間の流れのなかで、それぞれの祈りを捧げる多くの女性と少しの男性が一堂に会していた。ミサが終わると、赤ちゃんの洗礼式がとりおこなわれた。ミサで説教した年配の神父から、若い神父にかわって、洗礼の儀式をとりおこなっていく。オイルと水と塩とローソクの火、人間が生きていくための“根”となるものをしめしている。両親と介添人の夫婦の四名は最高の衣装で正装し、真剣に儀式をすすめる。そして親族や友人たちがこの光景を見守っている。さきほどの老婆もやってきて、その場にひざまずいた。「ああ、この子は、とても愛され、祝福され、この瞬間を生きているのだ」と思うと、なぜか涙が出てしまい、メルレルから「拭いたら」といわれる始末だった。重い扉を開けて外に出ると、街路では、端末の音が鳴り響き、だれもその騒音に気をとめることすらしめない。そのまさに同じ場所で、ひっそりと別の時間が流れている。さらにその背後には、日々の労働や困難がある。

満員列車のなかで、いつも車窓を見ている。もともと人が住んではいなかったであろう丘陵の斜面に、「土地を造成」して、家を建て、へばりつくようにして、家々がつづいている。土砂崩れが心配になりそうな狭い土地に建てられた家々、無愛想な灰色の、ひび割れた顔をしたマンション、数十年前の「文化住宅」、奇抜な色彩感覚の六角形の家、壁面にイラストが描かれたアパート、水田で背中を丸める老婆、何に苦しみ、何を喜び、日々をくらしているのだろう。これらの家々で暮らすひとたちには、「ご先祖様」がいるはずだ。いま都市郊外の私鉄沿線で、日々をなんとか暮らしているひとたちは、どこからやって来たのだろう。無数の、無名のひとたちが成し遂げてきた、ごくふつうの暮らし、その年輪、その厚みに、身体の奥から畏敬の念がわき上がり、くしゃみをした。